

【第1部】(Q1～Q25)

- Q1. ▶ 答え：イ 句法は「再読文字」。「未」は一度目「いまだ」、二度目「ず」と読む（意味は「まだ…ない」）。書き下し「未だ知らず」。訳「まだ知らない」。
- Q2. ▶ 答え：ア 句法は「再読文字」。「将」は一度目「まさに」、二度目「(んと)す」と読む。書き下し「将に死せんとす」。訳「今にも死にそうだ」。
- Q3. ▶ 答え：エ 句法は「再読文字」。「未」は一度目「いまだ」、二度目「ず」と読む（意味は「まだ…ない」）。書き下し「未だ見ず」。訳「まだ見ていない」。「見」は一字で「み」と読むので送り仮名はつけない。
- Q4. ▶ 答え：ウ 句法は「再読文字」。「当」は一度目「まさに」、二度目「べし」と読む。書き下し「当に行ふべし」。訳「当然行うべきだ」。
- Q5. ▶ 答え：ウ 句法は「再読文字」。「未」は一度目「いまだ」、二度目「ず」と読む（意味は「まだ…ない」）。書き下し「未だ決せず」。訳「まだ決まっていない」。
- Q6. ▶ 答え：エ 句法は「再読文字」。「未」は一度目「いまだ」、二度目「ず」と読む（意味は「まだ…ない」）。書き下し「未だ悟らず」。訳「まだ悟っていない」。
- Q7. ▶ 答え：イ 句法は「再読文字」。書き下し「応に解すべし」。
- Q8. ▶ 答え：ウ 句法は「再読文字」。書き下し「宜しく退くべし」。
- Q9. ▶ 答え：エ 句法は「再読文字」。「将」は一度目「まさに」、二度目「(んと)す」と読む。書き下し「鳥将に死せんとす」。訳「鳥が今にも死にそうだ」。
- Q10. ▶ 答え：ア 句法は「再読文字」。「須」は一度目「すべからく」、二度目「べし」と読む。「べし」の前は終止形なので「立つ」。書き下し「人須らく志を立つべし」。訳「人はぜひとも志を立てる必要がある」。
- Q11. ▶ 答え：イ 句法は「否定」。書き下し「此れ道に非ず」。
- Q12. ▶ 答え：ア 句法は「二重否定」。書き下し「学ばざるべからず」。
- Q13. ▶ 答え：エ 句法は「否定」。「不（ず）」は打消。書き下し「我れ命を知らず」。訳「私は天命を知らない」。
- Q14. ▶ 答え：イ 句法は「否定」。書き下し「彼れ遂に來たらず」。訳「彼はとうとう来なかった」。
- Q15. ▶ 答え：ア 句法は「否定」。書き下し「一言も発せず」。
- Q16. ▶ 答え：エ 句法は「否定」。「不（ず）」は打消。書き下し「我れ再び過たず」。訳「私は二度と過ちをおかさない」。「二度と～しない」は「不再～」（不+再）の語順になる。
- Q17. ▶ 答え：ア 句法は「否定」。「不（ず）」は打消。書き下し「我れ之を信ぜず」。訳「私はこれを信じない」。
- Q18. ▶ 答え：ウ 句法は「否定」。「非（あらず）」は名詞を打ち消す。「人道」は2字なので二点で返る。書き下し「此れ人の道に非ず」。訳「これは人の道ではない」。
- Q19. ▶ 答え：エ 句法は「二重否定」。書き下し「喜ばざるは無し」。
- Q20. ▶ 答え：イ 句法は「二重否定」。書き下し「驚かざるは無し」。
- Q21. ▶ 答え：ア 句法は「二重否定」。書き下し「備へざるべからず」。
- Q22. ▶ 答え：イ 句法は「二重否定」。書き下し「信ぜざるべからず」。
- Q23. ▶ 答え：ウ 句法は「二重否定」。書き下し「省みざるべからず」。
- Q24. ▶ 答え：エ 句法は「二重否定」。書き下し「救はざるべからず」。

- Q25. ▶ 答え：ウ 句法は「疑問」。文末が「ん」でなく連体形「ざる」で結ばれているので疑問。書き下し「何ぞ学ばざる」。訳「どうして学ばないのか」。
- Q26. ▶ 答え：ウ 句法は「疑問」。「安（いづくんぞ）」は「どうして」。文末に「ん」がないので疑問。書き下し「安くんぞ之を知る」。訳「どうしてこれを知っているのか」。
- Q27. ▶ 答え：ア 句法は「反語」。「誰か…ん」と文末が「ん」で結ばれているので反語。書き下し「誰か能く之を解かん」。訳「だれがこれを解くことができようか、いや、だれもできない」。
- Q28. ▶ 答え：エ 句法は「疑問」。「何をか…（連体形）」で、何を求めるのかをたずねる。書き下し「君は何をかを求むる」。訳「あなたは何を求めているのか」。
- Q29. ▶ 答え：イ 句法は「疑問」。文末の「乎（か）」は疑問。動詞「信」が先、目的語「之」があとなのでレ点で返る。書き下し「汝は之を信ずるか」。訳「おまえはこれを信じるのか」。
- Q30. ▶ 答え：ア 句法は「疑問」。文末に「ん」がないので疑問。書き下し「子は安くんぞ之を知る」。訳「あなたはどのようにこれを知っているのか」。
- Q31. ▶ 答え：ウ 句法は「疑問」。「何の故」は理由をたずねる言い方で、文末の「乎（や）」も疑問を表す。書き下し「何の故ぞや」。訳「どういうわけか（なぜなのか）」。
- Q32. ▶ 答え：ア 句法は「反語」。「豈に…んや」は反語。書き下し「豈に君子ならんや」。訳「どうして君子であろうか、いや、君子ではない」。
- Q33. ▶ 答え：イ 句法は「反語」。「安くんぞ…んや」は反語。書き下し「安くんぞ能く之を為さんや」。訳「どうしてこれをするのできようか、いや、できない」。
- Q34. ▶ 答え：ウ 句法は「反語」。「豈に…んや」は反語。動詞「忘」が先、目的語「之」があとなのでレ点で返る。書き下し「豈に之を忘れんや」。訳「どうしてこれを忘れようか、いや、忘れない」。
- Q35. ▶ 答え：イ 句法は「反語」。文末が「んや」で結ばれているので反語。書き下し「何ぞ天を怨みんや」（「怨む」は訓読では上二段に活用するので「怨みん」）。訳「どうして天を怨もうか、いや、怨まない」。
- Q36. ▶ 答え：エ 句法は「反語」。「安くんぞ…んや」は反語。「天命」は2字なので二点で返る。書き下し「安くんぞ天命を知らんや」。訳「どうして天命を知ろうか、いや、知らない」。
- Q37. ▶ 答え：ウ 句法は「反語」。文末が「んや」で結ばれているので反語（Q30の「知る」なら疑問）。書き下し「子は安くんぞ之を知らんや」。訳「あなたはどのようにこれを知ろうか、いや、知るはずがない」。
- Q38. ▶ 答え：イ 句法は「疑問」。書き下し「何ぞ之を憂ふる」。文末に「ん（や）」がなく連体形「憂ふる」で結ぶので疑問（「何ぞ之を憂へんや」なら反語）。訳「どうしてこれを心配するのか」。
- Q39. ▶ 答え：エ 句法は「反語」。「安くんぞ…んや」は反語。「虎子」は2字なので二点で返る。書き下し「安くんぞ虎子を得んや」。訳「どうして虎の子を得られようか、いや、得られない」。
- Q40. ▶ 答え：エ 句法は「反語」。「寧くんぞ…んや」は反語。「種」は「有らん」の主語なので「を」は送らない。書き下し「王侯将相、寧くんぞ種有らんや」。訳「王・諸侯・將軍・宰相になるのに、どうして決まった血筋などあろうか、いや、ない」。『史記』陳涉世家の言葉。
- Q41. ▶ 答え：ア 句法は「使役」。書き下し「民をして耕さしむ」。
- Q42. ▶ 答え：ア 句法は「使役」。「令…しむ」は使役。書き下し「民をして安んぜしむ」。訳「民を安心させる」。
- Q43. ▶ 答え：イ 句法は「使役」。「令…しむ」は使役。書き下し「民をして富ましむ」。訳「民を豊かにさせる」。
- Q44. ▶ 答え：ウ 句法は「使役」。書き下し「民をして習はしむ」。
- Q45. ▶ 答え：エ 句法は「使役」。「使…しむ」は使役。書き下し「天下をして帰せしむ」。訳「天下の人々を従わせる」。

- Q46. ▶ 答え：ウ 句法は「使役」。「使…しむ」は使役。書き下し「子をして写さしむ」。訳「子に書き写させる」。
- Q47. ▶ 答え：イ 句法は「使役」。「令…しむ」は使役。書き下し「民をして遷らしむ」。訳「民を移り住ませる」。
- Q48. ▶ 答え：イ 句法は「受身」。書き下し「笑はる」。
- Q49. ▶ 答え：エ 句法は「受身」。「見」は受身の目印。書き下し「用ゐらる」。訳「(人に) 用いられる」。
- Q50. ▶ 答え：ア 句法は「受身」。書き下し「罰せらる」。
- Q51. ▶ 答え：ア 句法は「受身」。書き下し「知らる」。
- Q52. ▶ 答え：エ 句法は「受身」。「AのBする所と為る」は受身で、返り点は「為二A所一レB」の形。書き下し「法の禁ずる所と為る」。訳「法に禁じられる」。
- Q53. ▶ 答え：イ 句法は「受身」。「AのBする所と為る」は受身で、返り点は「為二A所一レB」の形。書き下し「権臣の害する所と為る」。訳「権力をもつ家臣に害される」。
- Q54. ▶ 答え：ウ 句法は「受身」。「AのBする所と為る」は受身で、返り点は「為二A所一レB」の形。書き下し「漢の囲む所と為る」。訳「漢軍に囲まれる」。
- Q55. ▶ 答え：ウ 句法は「假定条件」。書き下し「如し王命ぜば」。
- Q56. ▶ 答え：エ 句法は「假定条件」。書き下し「若し許さば」。
- Q57. ▶ 答え：ア 句法は「假定条件」。「如し… (未然形+ば)」は「もし…ならば」。書き下し「如し国を去らば」。訳「もし国を去るならば」。
- Q58. ▶ 答え：イ 句法は「假定条件」。「苟くも… (未然形+ば)」は「もし…ならば」。書き下し「苟くも本を務めば」。訳「もし根本に努めるならば」。
- Q59. ▶ 答え：ウ 句法は「假定条件」。「若し… (未然形+ば)」は「もし…ならば」。書き下し「若し之を捨てば」。訳「もしこれを捨てるならば」。
- Q60. ▶ 答え：ア 句法は「假定条件」。「苟くも… (未然形+ば)」は「もし…ならば」。書き下し「苟くも心を尽くさば」。訳「もし心を尽くすならば」。
- Q61. ▶ 答え：エ 句法は「假定条件」。「若し… (未然形+ば)」は「もし…ならば」。書き下し「若し儉を尚ばば」。訳「もし儉約を尊ぶならば」。「尚ばば」(已然形+ば)だと確定条件の形になる。
- Q62. ▶ 答え：ア 句法は「逆接」。「雖 (いへども)」は下の語から返って読む字。書き下し「小なりと雖も」。訳「小さいといっても」。
- Q63. ▶ 答え：エ 句法は「逆接假定」。書き下し「縦ひ難からんとも」。
- Q64. ▶ 答え：イ 句法は「逆接假定」。書き下し「縦ひ遠くとも」。訳「たとえ遠くても」。形容詞に「とも」が付くときは連用形(遠く)。
- Q65. ▶ 答え：ウ 句法は「逆接假定」。主語「敵」が先、述語「強」があと。書き下し「縦ひ敵強くとも」。訳「たとえ敵が強くても」。形容詞に「とも」が付くときは連用形(強く)。
- Q66. ▶ 答え：エ 句法は「逆接假定」。書き下し「縦ひ言を費やすとも」。訳「たとえ多くの言葉を費やしても」。
- Q67. ▶ 答え：ア 句法は「確定条件」。目印の字がなく「已然形+ば」なので確定。書き下し「春来たれば」。訳「春が来ると」。
- Q68. ▶ 答え：イ 句法は「確定条件」。目印の字がなく「已然形+ば」なので確定。書き下し「志立てば」。訳「志が立つと」。
- Q69. ▶ 答え：イ 句法は「確定条件」。目印の字がなく「已然形+ば」なので確定。書き下し「流れ急なれば」。訳「流れが速いので」。

Q70. ▶ 答え：ウ 句法は「比較」。書き下し「百聞は一見に如かず」。

Q71. ▶ 答え：ウ 句法は「比較」。書き下し「巧詐は拙誠に如かず」。

Q72. ▶ 答え：ア 句法は「比較」。「AはBに如かず」は「AはBに及ばない」。書き下し「智は仁に如かず」。訳「知恵は思いやりに及ばない」。

Q73. ▶ 答え：エ 句法は「比較」。書き下し「之を知る者は之を好む者に如かず」。訳「(学問を) 知っている者は、それを好む者に及ばない」。(論語・雍也)

Q74. ▶ 答え：ウ 句法は「比較」。書き下し「之を好む者は之を楽しむ者に如かず」。訳「(学問を) 好む者は、それを楽しむ者に及ばない」。(論語・雍也)

Q75. ▶ 答え：ア 句法は「比較」。書き下し「怠るは勉むるに如かず」。訳「怠けるのは努めるのに及ばない(努めるほうがよい)」。

Q76. ▶ 答え：イ 句法は「比較」。書き下し「怨みに居るは過ちを改むるに如かず」。訳「恨みを抱き続けるのは、自分の過ちを改めるのに及ばない」。

Q77. ▶ 答え：イ 句法は「最上」。「Bに如くは莫し」は「Bに及ぶものはない=Bが一番」。書き下し「子を知るは父に如くは莫し」。訳「子を知ることでは父親が一番だ」。

Q78. ▶ 答え：エ 句法は「最上」。書き下し「富を求むるは足るを知るに如くは莫し」。訳「富を求めるには、満足することを知るのが一番だ」。

Q79. ▶ 答え：ウ 句法は「最上」。書き下し「人を用ゐるは長を取るに如くは莫し」。訳「人を用いるには長所を取るのが一番だ」。

Q80. ▶ 答え：ア 句法は「最上」。書き下し「国の宝は賢に如くは莫し」。訳「国の宝としては賢人が一番だ」。

Q81. ▶ 答え：ウ 句法は「選択」。書き下し「二者孰れか賢なる」。

Q82. ▶ 答え：ア 句法は「選択」。書き下し「仁と勇と孰れか尊き」。

Q83. ▶ 答え：エ 句法は「選択」。書き下し「守ると攻むると孰れか勝れる」。

Q84. ▶ 答え：ア 句法は「限定」。「唯だ…のみ」は限定。書き下し「唯だ仁者のみ人を愛す」。訳「ただ仁者だけが人を愛する」。

Q85. ▶ 答え：エ 句法は「限定」。「唯だ…のみ」は限定。書き下し「唯だ道のみ是れ務む」。訳「ただ道だけに努める」。

Q86. ▶ 答え：イ 句法は「限定」。「独り」は「ただ〜だけ」。書き下し「独り其の身を善くす」。訳「ただ自分自身を善くするだけだ」。(孟子の「窮すれば則ち独り其の身を善くす」から)

Q87. ▶ 答え：ウ 句法は「限定」。「唯だ…のみ」は限定。動詞「従」が先、「道」があとなのでㄴ点で返る。書き下し「唯だ道に従ふのみ」。訳「ただ道理に従うだけだ」。

Q88. ▶ 答え：エ 句法は「累加」。「不唯(ただに…のみならず) …亦」は累加。書き下し「唯だに己を利するのみならず、亦た人を利す」。訳「自分を利するだけでなく、他人をも利する」。

Q89. ▶ 答え：ウ 句法は「累加」。「不唯(ただに…のみならず) …亦」は累加。書き下し「唯だに己を修むるのみならず、亦た人を安んず」。訳「自分を修めるだけでなく、人を安心させもする」。

Q90. ▶ 答え：ア 句法は「累加」。「非唯(ただに…のみにあらず) …亦」は累加。書き下し「唯だに財を蓄ふるのみに非ず、亦た徳を積む」。訳「財産を蓄えるだけでなく、徳も積む」。

Q91. ▶ 答え：イ 句法は「累加」。「不唯(ただに…のみならず) …亦」は累加。「万代」は2字なのでㄴ点で返る。書き下し「唯だに世に益するのみならず、亦た万代に及ぶ」。訳「世の中の役に立つだけでなく、遠い後の世にまで及ぶ」。

Q92. ▶ 答え：ア 句法は「累加」。「不唯（ただに…のみならず）…亦」は累加。書き下し「唯だに功を成すのみならず、亦た身を退く」。訳「手柄を立てるだけでなく、身を引きもする」。

Q93. ▶ 答え：ウ 句法は「抑揚」。「すら…況んや…をや」は抑揚。書き下し「死すら且つ畏れず、況んや其の余をや」。訳「死でさえ恐れない、ましてそのほかのことはなおさらだ」。

Q94. ▶ 答え：イ 句法は「抑揚」。「すら…況んや…をや」は抑揚。書き下し「匹夫すら奪ふべからず、況んや三軍をや」。訳「一人の男でさえ（志を）奪うことはできない、まして大軍ならなおさらだ」。

Q95. ▶ 答え：エ 句法は「抑揚」。書き下し「蟻すら且つ命を惜しむ、況んや人をや」。

Q96. ▶ 答え：ア 句法は「抑揚」。書き下し「寒士すら且つ操を守る、況んや貴顕をや」。

Q97. ▶ 答え：イ 句法は「詠嘆」。書き下し「賢なるかな、回や」。

Q98. ▶ 答え：イ 句法は「詠嘆」。「哉（かな）」は詠嘆で、連体形につく（遠き）。書き下し「遠きかな、其の道や」。訳「遠いことだなあ、その道は」。

Q99. ▶ 答え：ウ 句法は「詠嘆」。書き下し「豈に壮ならずや」。

Q100. ▶ 答え：エ 句法は「詠嘆」。書き下し「何ぞ其れ明らかなるや」。